



司法修習生25人が見学、受講

新66期司法修習生25人と指導弁護士5人が、医療安全に関する講義の受講と病院見学のため、10月15日に本院を訪れました。裁判官や検察官、弁護士などをめざす司法修習生は、南正人手術部長と内山昭則集中治療部副部長の案内により各部署を見学し、中島和江中央クオリティマネジメント部長から「阪大病院における医療安全対策の実際」及び「有害事象調査に関する諸課題」について講義を受けました。参加者からは、「医療現場の見学を通じて阪大病院の安全対策の実際性を理解できた」「医療安全に関する国内外の最新の知見が理解できた」などの感想をいただきました。

手術室を増設



本院が平成5年に吹田に移転して以来、手術室は18室でした。しかし、手術数は年間約5,000件から9,000件に増加し、臓器移植、内視鏡手術、ロボット手術など、手術の内容も大きく進化しています。手術待ち患者さんへの対応、手術手技や手術教育のさらなる推進のため、この度、外来・中央診療棟4階に新たに2室増設し、本院の手術室は計20室になりました。手術室への出入口も1カ所増やし、短時間での入替が必要な眼科手術の入退室などが円滑に進むようになっています。今後は人員の配置やソフト面の整備を進め、手術の一層の効率化を図ってまいります。



クリスマスコンサート
12/20

市民公開フォーラム
12/21



医師がサンタに
12/24

カザフスタンから受講、見学

10月28日～31日の4日間に渡り、カザフスタン共和国から医療関係者21名が本院を訪れ、講義受講と施設見学が行われました。

カザフスタンと日本の医療の違いから、医療情報部、薬剤部、放射線部、臨床検査部の見学では、検査のオートメーション化、電子カルテシステムに大変興味を



持たれ、「医療経済」「感染制御」「医療情報」「周産期医療」「クオリティマネジメント」等の講義においても多数の質問をされるなど、有意義な4日間となりました。

ナレッジキャピタルで国際シンポジウム開催



11月15日、グランフロント大阪、ナレッジキャピタルにおいて、本院未来医療開発部国際医療センター主催の第1回国際医療シンポジウム「Go! Global!!!」を開催しました。吉川病院長の開会の辞に始まり、澤国際医療センター長、中田副センター長の講

演、中村人間科学研究科教授、ホーキング国際公共政策研究科准教授の講演、内閣官房健康・医療戦略室から吉田企画官、MEJ (Medical Excellence JAPAN) から北野業務執行理事、外務省国際協力局から小沼国際保健政策室長の講演があり、いずれも本院の国際化にとって興味深い内容の講演で、4月に設置された本院国際医療センターの今後の活動の追い風となるシンポジウムとなりました。

本院の消化器内科は消化器病全般を扱っており、大きくは「肝臓」「胆嚢・膵臓」「食道から大腸までの消化管」という三つの領域に分かれています。「肝臓」では肝炎と肝臓がん、「胆嚢・膵臓」では膵臓がん、「消化管」では消化管がんや炎症性腸疾患などの診療に力を注いでいます。「ウイルス性肝炎」については、インターフェロンやリハビリテーションによる治療件数が5000例以上（関連病院を含む）という日本有数の実績を持っています。また昨年12月からはシメプレビルと人ひとりの治療方針に



病棟カンファレンスの様子

腸疾患などの診療に力を注いでいます。「ウイルス性肝炎」については、インターフェロンやリハビリテーションによる治療件数が5000例以上（関連病院を含む）という日本有数の実績を持っています。また昨年12月からはシメプレビルと

腸疾患などの診療に力を注いでいます。「ウイルス性肝炎」については、インターフェロンやリハビリテーションによる治療件数が5000例以上（関連病院を含む）という日本有数の実績を持っています。また昨年12月からはシメプレビルと

腸疾患などの診療に力を注いでいます。「ウイルス性肝炎」については、インターフェロンやリハビリテーションによる治療件数が5000例以上（関連病院を含む）という日本有数の実績を持っています。また昨年12月からはシメプレビルと

患者さんの負担が少ない 優しい最新医療

消化器内科

「肝臓がん」については、がんの進行度と肝臓の持つ予備能（機能がどの程度保たれているか）に配慮して治療方針を決めています。代表的な治療として、内科的なラジオ波焼灼療法（ラジオ波を発する針を挿入し病巣を死滅させる治療法）、外科的な肝切除、放射線科的治療の肝動脈塞栓術などがあります。週に一度、内科・外科・放射線科の医師が集まり、患者さん一人ひとりの治療方針に

ついて綿密に議論しています。また議論の結果肝移植に至るような症例もあります。「膵臓がん」については、ステント（管腔内部を広げる機器）を挿入して治療する内視鏡的なアプローチや、抗がん剤治療などを行

います。診断が難しく治療法も限られているため、早期発見のための基礎的研究も大学病院の使命として取り組んでいます。「初期の食道がん・胃がん・大腸がん」などには、内視鏡による粘膜下層剥離術を積極

的に実施しています。増大傾向にある「炎症性腸疾患」に関しては、潰瘍性大腸炎より、難治性のクローン病の患者さんが多いことが本院の特徴です。従来は免疫抑制剤や抗炎症剤を使用していました

が、最近新しい生物学的製剤も使用して、個々の患者さんに最適な治療法をバランス良く行っています。近年、来院患者さんの高齢化が進んでおり、心臓や腎臓の疾患の負担が少ない優しい治療を目指しています。

日常生活に円滑適応

入院患者さんの「満足度1位」

「思わず頑張れる」

リハビリテーション部



呼吸器センターでのリハビリの様子

入退院センターから正面にみえるリハビリテーション部には、医師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が所属

し、入院患者さんが退院後の日常生活に円滑に適應できるよう、最良・最適なリハビリを提供するために、日々

努力を重ねています。特定機能病院である本院には、超急性期・急性期の患者さんが多く、入院期間も限られています。このような患者さんの身体機能や動作能力の回復には、リハビリの早期開始が不可欠であることから、入院直後や手術後の早い時期からリハビリが開始できるよう努めています。

病状が安定しない、あるいは治療による副作用等の理由で病室から出てくることのできない患者さんには、各療法師が病棟・病室へ行き、対応しています。病状が安定し、制限が

なくれば、1階にあるリハビリテーション部の各療法室（理学療法室・作業療法室・言語療法室）において、より高度なリハビリを積極的に行っていきます。また病棟9階にあるハートセンターには専従の理学療法士を配置し、看護師とともに専門的な心臓リハビリを実施しています。

新診療科長ごあいさつ



循環器内科長
さかた やすし
坂田 泰史

このたび、大阪大学医学部附属病院循環器内科長として新たに就任いたしました。当科では、虚血性心疾患、不整脈、心不全などすべての循環器疾患について、24時間体制で診療を行っております。また日本全国から来られる、重症心不全、重症不整脈、冠動脈複雑病変をお持ちの患者さんに対しても、「我々が日本の循環器医療の最後の砦である」という使命感のもと丁寧に治療にあたっております。今後も地域、そして日本の循環器医療を守るべく、全力を尽くしてまいります。よろしくごお願い申し上げます。

(平成25年12月1日就任)

室や患者指導室を設置することで、専門性の高いリハビリをより早期から安全かつ無理のない範囲で提供できるとも、病状の急変にも迅速に対応することが可能となっております。このように、リハビリテーション部では患者さんよく聞きます。昨年1

月に実施された入院患者さんの満足度調査では、常に最良・最適なアプローチを心がけています。橋田剛二技師長（副診療技術部長）は、「患者さんから「しんどかったのに、思わず頑張ってしまったよ」という声を